Mon Nara

Numéro248 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 Janvier-Février 2012 1,2 月合併号

日本とフランスの間の＜本能的共感＞ （奈良日仏協会総会について）・・・・・日本語訳は次ページに

« Sympathie instinctive » entre la France et le Japon

(A propos de notre A.G. de l'A.F-J.N, tenue le dimanche 5 février 2012)

Olivier Jamet, vice-président

Comme le rappelait fort judicieusement son Excellence Monsieur Christian Masset, nouvel Ambassadeur de France, au déjeuner organisé en son honneur le jeudi 9 février 2012 à Tokyo à l'Hôtel *Four Seasons* par la Chambre de Commerce et d'Industrie Française du Japon (CCFIJ), Paul Claudel, Ambassadeur de France à Tokyo de 1921 à 1927, aimait à parler de « sympathie instinctiveinstinctive » pour évoquer ce ferment actif qui donne aux relations franco-japonaises sa vitalité étonnante depuis plus d'un siècle.

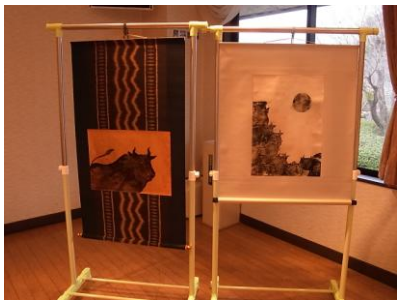
« Sympathie instinctive » ou « affinités électives », comme aurait dit Goethe, un tel courant privilégié sert de puissant ciment à notre Association Franco-Japonaise de Nara depuis sa fondation il y a plus d'une quinzaine d'années et s'est manifesté vivement à notre dernière Assemblée Générale qui s'est tenue le dimanche 5 février.

En effet, après avoir passé en revue les nombreuses activités de 2011, nous avons dessiné les actions qui seront entreprises en 2012 comme la Fête des Cerisiers en Fleurs le dimanche 8 avril (au Musée de Yamato-bunkakan : appréciation d'oeuvres d'art, conférence du Directeur du Musée, déjeuner...), la Fête du Beaujolais Nouveau en novembre, le Ciné-Club, "France à la carte", le cours de français ou encore, comme mon activité éducationelle soutenue par l'AFJN, une session interculturelle mensuelle de lecture en français et en japonais d'extraits de l'oeuvre très célèbre de Natsume Sôseki *Je suis un Chat* （吾輩は猫である *Wagahai wa, neko de aru*) à partir du mois d'avril.

Puis, après ces fructueux travaux, tous réunis fort agréablement autour d'un buffet richement achalandé, nous avons assisté à un merveilleux concert de piano et clavecin, donné par notre Amie Keiko Higashi, lauréate de grands concours internationaux, ayant séjourné à Paris une quinzaine d'annéees pour ses études et ses riches activités musicales.

Debussy (*La fille aux cheveux de lin* », *Les collines d'Anacapri*), Rameau (*La Poule*, 6°ordre des pièces pour clavecin), Schumann (*Papillons*) et un très vif et agréable bis (*Minstrels* de Debussy) nous ont transportés dans un monde chatoyant et enchanteur. Nous l'en remercions vivement et attendons avec impatience ses nouveaux concerts !

Paul Claudel parlait de « sympathie instinctive » entre le Japon et la France... N'est-ce pas ?



日本とフランスの間の＜本能的共感＞

(2012 年 2 月 5 日開催の奈良日仏協会総会について)

副会長　オリヴィエ　ジャメ

クリスティアン マセ新フランス大使閣下に敬意を表して、日本のフランス商工会議所（CCFIJ）が 2012 年 2 月 9 日東京のフォーシーズンズホテルで催した昼食会の席で、大使が賢明にも思い出させて下さったように、1921 年から 1927 年にかけて東京でフランス大使を務めたポール クローデルは＜本能的共感＞について好んで語り、この活性酵素が一世紀以上経った今も、日仏関係にすばらしい活気を与えていることを喚起したのです。
＜本能的共感＞あるいはゲーテが言った＜選択的親和＞というような恵まれた潮流が、15 年以上前の創立以来、私達の奈良日仏協会を強く結束させる絆の役を果たし、2 月 5 日に開催された今回の総会でも生き生きと現れていました。

総会で、私達は 2011 年度に実施した数多くの活動を振り返り、さらに 2012 年度に実行予定の活動計画を決定しました。例えば、4 月 8 日(日)のお花見会(大和文華館にて、美術鑑賞、館長講演、会食など)、11 月のボジョレヌヴォーの夕べ、シネクラブ、“フランス・アラカルト”、フランス語講座、さらに協会に支援された私の教育活動として、4 月からの夏目漱石の有名な作品『吾輩は猫である』の抜粋をフランス語と日本語で講読する月例の相互文化セッションなどです。

続いて、総会での実り多い作業を終え、参加者全員は豪華なビュッフェが準備されたホールに愉快な気持ちで集まり、東 桂子さんによるピアノとクラヴサンのすばらしい演奏を聴かせていただきました。東 桂子さんは、15 年間パリで学業と豊富な音楽活動を続け、いくつもの主要な国際コンクールで受賞されています。

ドビュッシー（亜麻色の髪の乙女、アナカプリの丘)、ラモー（La Poule,クラヴサン曲集 6 番)、シューマン(パピヨン)、とても軽快で楽しいアンコール曲(ドビュッシーのミンストレル)などが、私達を光り輝く魅惑の世界に誘ってくれました。

彼女に心からお礼を申し上げますとともに、彼女の次のコンサートを心待ちにいたしましょう。

ポール クローデルは日本とフランスの間の＜本能的共感＞と言いました・・そうですよね。（日本語訳　森井）

－2012 年度定期総会－

巻頭記事にもその一端が紹介されたとおり、2 月 5 日（日曜日）午後、奈良天平クラブにて奈良日仏協会 2012 年度定例総会が開催されました。2011 年度の活動報告および会計報告・監査報告が承認された後、2012 年度の役員、活動計画及び予算が提案されいずれも原案通り承認されました。

今年度の役員は以下のとおり承認されました。交代は昨年度まで理事を務められた高尾奈美江さんの退任のみです。

<2012 年度役員>

会　長	坂本　成彦	理　事	仲井　秀昭
副会長	三野　博司	理　事	中野　愛弓
副会長	オリヴィエ・ジャメ	理　事	野島　正興
副会長 兼 事務局長	濱　　惠介	理　事	三木　正義
理　事 兼 会　計	樋口　順一	理　事	森井　桂子
理　事	浅井　直子	監　事	南城　　守
理　事	井田　眞弓		

(50 音順)

次に、決算・予算の概要、活動計画の及び議論の要点をご紹介します。

（1）　決算報告

収入は、会員数の増加が期待通りなかったこと、お花見会の中止によるイベント収入がなかったことなどで予算より約 6 万円の減少となった。支出は予算額に対し約 10 万円増えているが、行事中止にともなう郵送費の増加と東日本大震災義捐金が主な要因である。次年度繰越金は、約 11 万円少なくなっている。

（2）　活動計画

新たな方向性を示すものとして、奈良の文化遺産などの日本文化についてフランス語圏へ発信する方向が打ち出された。日本人会員がフランス文化に親しむ一方向交流から真の相互交流を目指すものである。ホームページのフランス語併記の拡大にも努める。主な行事予定は前年度とほぼ同様であるが、会員相互の交流を支援するため、会員名簿を作成することが決まった。また、2014 年度が当協会の創立 20 周年に当たるので、記念事業の準備を始める。

（3） 予　算

前年度と比較して収入・支出の総額はともにほぼ同様の予算となっている。

（4） 主な意見・議論

・役員の固定化傾向は望ましくなく、新しいメンバーの発掘・登用が必要。

・日本文化発信の手始めとして、関西フランス人クラブとの連携・交流を図る。

・20 周年記念事業として会員からの寄稿を中心とした記念誌を作成したい。記念パーティも開催する予定。

・名簿作成に当たっては、個人情報保護の点から会員の掲載希望内容を確認する。

・ボジョレー・ヌヴォ―の夕べに関して、本場フランスでこれは庶民的なイベントだが、日本では高級な扱いになっている点が違う。またボジョレーに限らずワインの新酒が出来たことを楽しむことは地方毎に行われる。

なお、今年も天平倶楽部の中塚様（会員）には、大変お世話になりありがとうございました。

『サン=ジャンの私の恋人』から『夜明けのスキャット』まで…

中辻純子（梨里香）

2011 年はまたたく間に過ぎ去ってしまいました。3 月 11 日以来、日本中が大きな悲しみに襲われたことは言うまでもありませんが、奇しくも同じ日に、私のフランス語の恩師松島征先生（京都大学名誉教授）が胃癌の手術をされ、その後急逝されました（享年 69 歳）。私にとっては、追い討ちをかけられたような辛い出来事でした。

少し季節を遡りましょう。それは初夏、ちょうど夏至の頃、フランスにサン=ジャン祭という聖ヨハネの火祭りがあります。祭りの日にひとりの女が男と出会い、恋に落ち、そして結局捨てられる…という、シャンソン・レアリスト（現実派シャンソン）の典型のような歌『サン=ジャンの私の恋人』（1942 年）についてのお話。サン=ジャン祭の残り火を恋人と飛び越えるとその二人は結ばれる、というロマンティックな言い伝えもありますが、祭りの炎は人の心を掻き立てるのでしょうか。

≪…私は、サン=ジャン祭のバルミュゼットに出かけ、一人の美しい男に出会う。甘美な言葉とその大胆さに魅かれ、私の大切なものをあげてしまう…けれどそれは結局、恋の罠、祭りが終われば恋も終わり、彼はもう愛してくれない…≫

なんだかありそうな話ですが、Gm で創唱するリュシエンヌ・ドリールの低い声と三拍子のリズムが不思議な魅力を醸し出しています。

また、『サン=ジャンの私の恋人』と言えば、フランソワ・トリュフォー監督の映画『終電車』（1980 年）を思い出される方も多いことでしょう。こちらはドイツ占領下のパリが舞台。男女 3 人の関係と時代の緊張感が織りなすドラマです。セザール賞 10 部門を受賞した同監督の最大のヒット作ですが、時代を象徴するドリールの独唱が、映画の導入部で非常に効果的に使われています。そして、この歌が生まれてから 70 年。『サン＝ジャンの私の恋人』は、今日でもフランス人の愛唱歌の上位に必ず入っているというのですから、歌そのものに力があるのでしょう。

ところで、同じようなことがつい最近の日本の歌謡界でも起こっているのをご存知ですか？その火付け役は、アメリカのピンク・マルティーニ・ジャズ・オーケストラ。歌うは、あの由紀さおりさん。『夜明けのスキャット』をはじめ 1969 年にヒットした曲ばかりを集めたアルバムが欧米で評価され、昨年末より、アメリカとカナダでヒットチャートの 1 位を取っています。しかも、そのほとんどが日本語で歌われています（『さらば夏の日』のみフランス語！）。このブームの理由は、関係者も由紀さんご本人もよくわからない…とのことです。しかし、意味はわからないけれど、≪カンジル、ワカル≫ ということが、アートの世界ではしばしば起こります。詳細はわからなくとも、原曲を原詞で歌うからこそ心に響く…。

何が言いたいのか…ですか？　それは、今さらですが、フランスの歌であるシャンソンは、フランス語で歌うことが最も望ましいということ。亡くなられた恩師も常々仰っておられました。

≪シャンソンは、フランス語で歌って下さいネ、梨里香さん！≫ と。　　ご冥福をお祈りいたします。

＊ 『フランス語でシャンソンを・・・』講座　講師中辻純子（梨里香）

毎月第 2，4 火曜日 10：30am～　学園前カフェミュゼット

名 句 の 花 束 (19)

副会長　三野　博司（奈良女子大学教授

Faites attention aux baobabs !
バオバブに気をつけなさい ！
サン=テグジュペリ『星の王子さま』1943 年

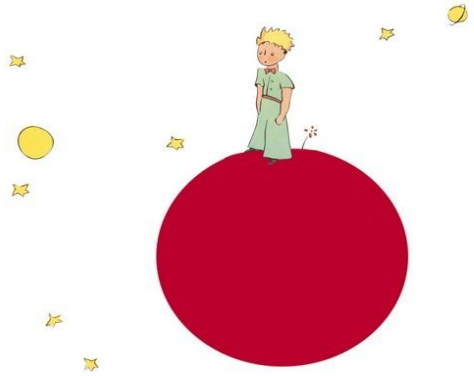
「３・１１」以後，震災をめぐって，ヴォルテールとカミュを取り上げましたが，最後にもう一つ『星の王子さま』について書きたいと思います。この物語が震災に直接かかわるというのではありません。しかし，もともと象徴的意味合いの強い作品ですから，作者のメッセージの射程は広く，人間の災厄についての考察にまで及んでいます。

『星の王子さま』公式サイト（http://www.lepetitprince.com/フランス語版ですが英語版に切り替えも可）では，２０１１年３月２５日，「王子さまは日本のために泣いている」という見出しで，大きな絵と文が掲載されました。王子さまが自分の星の上に立っているおなじみの絵なのですが，ここではその星が赤く塗りつぶされて，日の丸に見えます。そこに付されたメッセージを日本語に訳して紹介しましょう。

「日本と『星の王子さま』とはとても強い絆で結ばれている。３０種もの日本語訳があり，もっとも私たちに身近な存在である三野博司をはじめとして多くの研究者が『星の王子さま』やサン=テグジュペリにたいして著作をささげている。箱根には「星の王子さまミュージアム」があり，最近では寄居パーキングエリアに星の王子さまをテーマとした施設が開設された。日本では『星の王子さま』の世界はしばしば宮崎駿の作品世界と比較されるが，彼はガリマール社が刊行した『サン=テグジュペリ，デッサン集成』に序文を寄せている。[……] だからこそ，星の王子さまの友である私たちは，かくも身近なこの国の不幸に心を痛めているのだ」

私はこのサイトの管理者であるシルバン・ルコワントに会ったことがあり，また自分の名前が出されているからには，これに応答すべきだと考えて，感謝の返事を送りました。以下は，４月１３日，「星の王子さま」公式サイトに掲載された仏文の日本語訳です。

「はげましのメッセージをありがとう。私たちは王子さまを泣かせてしまった。古来私たちの列島は幾度も自然災害に襲われており，そうした事態は目新しいものではないとはいえ，この災禍はその前例のない規模の大きさで私たちを震撼させるものだ。しかも今回は，人類が産



み出し，統御できない核の炎が問題をいっそう困難にしてしまった。『星の王子さま』の作者は，１９４５年に日本の２つの都市の上空で炸裂した原子爆弾のことは知らなかった。しかし，その２年前，彼は遺書となった書物のなかでこう書いたのだ。＜ところで王子さまの星には恐ろしい種があった。それはバオバブの種だった。星の土壌には種がはびこってしまった＞。私たちは，自分たちの列島や地球が放射能によって汚染されないことを望みたい。だからこそ，もう一度，このことばを想起しなければならないのだ。＜バオバブに気をつけなさい！＞」

バオバブの話は第５章に出てきます。王子さまは語り手にこう言うのです。「たった一本のバオバブでも，手当てが遅れると，もう根絶することはできない。星全体をふさいでしまう。その根で，星に穴をあけてしまう。そして，もし星がとても小さくて，バオバブの数があまりにも多いときには，星を破裂させてしまうんだ」。バオバブによって破裂する星は，もちろん地球を連想させます。サン=テグジュペリは核戦争までを予想したわけではないにしても，第二次大戦中に書かれたこの物語のなかのバオバブは地球的規模の戦争を暗示しているでしょう。このあと，王子さまは，毎日きちんと仕事をして，バオバブの芽を小さいうちに摘み取っておくことがたいせつなんだと語ります。その助言を受けて，語り手はバオバブの絵を描いて，読者である子どもたちに向かってこう呼びかけるのです。「子どもたちよ！　バオバブに気をつけなさい！
Enfants ! Faites attention aux baobabs !」

Junko のパリ便り（5）

～日本語教育～

高橋　潤子

子どもを持つ在仏日本人が一度は頭を悩ませる問題は、いかにして子どもに日本語を習得させるか、子どもの日本語力を維持するかということだろう。国際結婚で生まれた子どもや、外国に住む日本人の子どもはバイリンガルになるからいいですね、とよく言われるが、現実はそんなに簡単ではない。

フランスに住む日仏カップルの子どもの場合、日常のほとんどをフランス語で過ごすことが多い。わが家の子どもたちは二人とも、生後 5 カ月から保育園に入り、フランス語づけで大きくなってきた。私は子どもたちには日本語で話しかけるものの、父親が同席している時は全体の会話は必然的にフランス語になる。学校でもフランス語、姉妹間でもフランス語、となると、日本語に接する機会が極端に少なくなるのだ。もちろん日本語の本を読み聞かせる、日本語の DVD を見せる、ドリルをやらせるなど努力はしているのだが、やはり限界がある。

在仏の日本人家庭の場合、家庭内の言語が日本語であるため、概して会話には不自由がない。しかし読み書きはフォローしていく必要があるし、家族間の話し言葉だけでは、どうしても語彙が限られてしまう。特に小学校高学年ぐらいから急速に増えていく抽象語を身につけていくというのは難しく、日本の同世代の日本語と比べると、やはり多少の遅れが出てしまうのは避けられない。中学生、高校生になると、家族よりも友達との関係の方が重要視されてくるし、日本人家庭であっても日本語は家で最低限の生活用語しか話さない、兄弟とはフランス語という子どもたちも多い。

そこで日本語で話さなければならない環境を確保するために、日本語の学校に通わせることになる。幸いパリにはいくつも選択肢があり、私も下の子どもを週二回日本語の教室に通わせている。今は一年生の教科書を使ってひらがなを学んだり、プリントの作業をしたりしているが、今のところ非常にやる気を持って取り組んでいる。といっても彼女は日本語よりはフランス語が圧倒的に優勢で、日本語で言われたことはわかるが、ちょっと複雑な話になると「フランス語で何て言うの？」と言ってくる不届きものである。上の子は、3 年間パリの日本人幼稚園に通っていたため、日本語のベースはその分しっかりしているし、過去に日本語教室に通ったこともある。今回も「日本語の勉強する？」と聞いたところ、「しない。フランス語の勉強する。」と答えたので、結局行かせなかった。少なくとも日本語で答えたのだからよしとしよう。確かに小学校の最終学年ともなれば、毎日宿題をするだけでも１～２時間かかってしまうから、それに加えて日本語の勉強もとなると確かに負担は大きくなる。

本当は親がちゃんと日本語を教えなければならないのだろうが、わが家の場合、どうしても親子の間だと甘えが出てしまってうまくいかない。また、上の子の場合も、強制してやらせようと思えばできないこともなかったが、私が一番恐れていることは、日本語を勉強するのが嫌、ひいては日本語自体が嫌と思われてしまうことである。実際、日本語の勉強を頑張りすぎて、日本語アレルギーになってしまった子どもの例も見てきた。逆に大人になってから日本語を始めて非常に達者に話すようになったフランス人も何人も知っている。なので今は日本の文化や日本語に触れる機会をできるだけ作ってやり、日本語が楽しい、日本文化が好き、という気持ちを抱き続けてもらえればそれでいいと思う。今のペースで日本語の勉強を続けてくれればそれでいいし、たとえ中断しても将来また勉強しようと思った時に大いに役に立つだろうから。

しかし何といっても日本語取得に一番いい方法は、日本に行くことだ。日本語を話す必要が生じるし、あらゆる面で日本語づけになるので、日本滞在後にはぐんと日本語力が伸びる。唯一の難点は費用がものすごくかかるということだ。わが家もできるだけ年一回の帰省を心がけているが、今年から上の子の航空料金がおとな料金になるため、こちらも頭の痛い問題となっている。

ボルドーの思い出

小寺順子

昨年の７月２日から10日までボルドーの片田舎を訪れました。
宿泊先は３年前に我が家に泊まりにいらっしゃったPhilippe Amatさん。ボルドーの空港に着いたのは２２時半という遅さにもかかわらず空港まで車で迎えに来てくださいました。

Philippe さんの家はボルドー市内から車で約２時間の Mussidan という小さな町。ここでびっくりしたのがPhilippe さんの家の大きさ。私たちが泊めてもらった部屋にはシャワーと洗面所がついてあり、ゆったりとくつろげました。となりの部屋はPhilippeさんご夫妻の専用のバスルーム。そのとなりがご夫婦の寝室でした。

次の日は庭で朝食です。片田舎の夏は庭で朝食を取るというのが定番になっているようで、大きなボールにカフェオーレをなみなみと入れてもらい、手作りのジャムにバゲット、チーズに果物という豪華な朝食でした。

サルラという中世の街並みが残る街へ車で案内してもらい、その後２年前に我が家に訪れた Marianne Francheoさんの家に招待されました。ここでもびっくりしたのがMarianneさんの家の大きさ。彼女の家はプール付きでした。実はフランスの片田舎ではプール付きの家というのはそれほどめずらしいことではないのです。

Marianne さんは鴨のお料理でランチをご馳走してくださり、その後手作りのすてきなパンチをいただきました。

３日目と４日目はボルドーからタクシーで１０分というChateau Rabaというシャトーホテルを訪れました。このホテルはお城のような形をしているわけではないのですが、庭でゆったり夜遅くまで夕食を楽しむことができ、すてきなホテルでした。

５日目と６日目は Biarritz へ行きました。ここへ行く前にまずSt-Jean-de-Luzという小さな海辺を訪れ、FACEBOOKで知り合いになったAlain Cadillacさんと落ち合いました。彼はかのミッシェル・フーコーの友達であったのですが、その他にも私の大学院での研究テーマ Tahar Ben Jellounの友達とも知り合いということでした。

レストランで何品か料理を取ってみんなで食べました。そして帰りにはワインを買ってくださいました。Tahar Ben Jelloun の友達を紹介してもらいたかったのですが、Alain さんは病気にかかり、両頬を二度手術しないといけないということで、その話はまた彼が回復してからということにしました。

その後Biarritzに行き、ナポレオン三世がウージェーヌ妃に送った別荘を改築したという由緒ある豪華なHotel de Palaisに宿泊しました。このホテルには大きなプールがあったにもかかわらず、お天気が悪く寒かったため入ることができず、レストランのガラズ越しにプールを眺めながら夕食を取りました。

最終日はワインの産地、かの有名なSt-EmillionとBergerac, Monbazillacを訪れました。同じ甘口の白ワインでも飲み比べ見ると全然味が違い、ワインの奥深さというものを味わうことができました。St-Emillion とBergeracは特に赤ワインが有名で、予算と好みを店の人に告げ、試飲してワインをおみやげに選びました。

最後の朝は飛行機が６時と早く、４時には空港に着かなければならなかったのですが、こんな時間にもかかわらず、Philippeさんは夜中に起きて空港まで車で送ってくださいました。

短かった旅でしたが、フランス人の人情にふれ、彼らの美食とインテリアへのあくなき追求にフランス人気質というものを見いだせた、有意義な旅だったと思います。

第 104 回フランス・アラカルト開催

１月１９日(木)１５：００から、冷たい雨の中を１２名の参加を得て、いつものように Mardi Mardi のアットホームな雰囲気の中で、今年最初のフランス・アラカルトが始まりました。

今回は、京都で AJ・France というフランス語教室やフランス留学サポートなどを展開している会社の経営者 Jean-Jacques TRUCHOT さんをゲストにお招きし、興味深いお話をたくさんお聞きすることができました。

北海道出身の奥様との間に１歳半のお嬢様がおられるそうで愛妻家でとても子煩悩なパパとお見受けしました。

皆様は、papier d'Arménie というのをご存知でしょうか？これはお香の一種だそうで、薔薇などの香りを滲み込ませた紙らしいです。細くちぎって火をつけるとたくさんの煙が部屋に立ち込め、いやな臭いを消してくれると共にリラックス効果もあり、しかもいつまでも香りが残らないという特徴を持っているそうです。シャルル・アズナブールのシャンソンにも出てくる、あちらでは良く知られたお香だそうで、彼の会社で扱っておられるようです。

お菓子作りをしながらフランス語を学ぶ教室では、彼自身がお母様が良く作ってくださった思い出のお菓子を作ってレッスンをしておられるとか。楽しそうですね。

もう一つ、お仕事から気づかれた留学の際の注意点をお聞きしましたので、いつか留学をとお考えの方はご参考になさってください。

彼が今まで扱われた中で、留学と帰国後の生活も含めてとても成功したケースと、どうしてもサポートを断らざるを得なかったケースがあるとのことです。留学を希望された方の意識の高さや語学力、又あちらでの学習のための費用やプログラムの立て方などがしっかりしている事が大切です。留学前にある程度の語学力をつけておくこと、必要な費用はどのくらいかかるか綿密に調べ、それをしっかりと準備すること、夢と現実を見極め、自分が選ぼうとしている学校は自分の能力や、自分が進もうとしている道に合っているかどうかを良く考えることが大切だということです。高い費用を出して留学するのですから、ぜひ成功させたいですね。　　森井　桂子

◆第１０５回フランス・アラカルトご案内

次回のゲストは、アンドリー・ドゥコーAdeline Decaux さん。1986 年 9 月 20 日生まれ。フランス東部ロレーヌ地方のメス市出身。メス大学で５年間現代文学を学ぶ。2010 年現代文学修士号取得。専門は民俗学批評、文学と民俗学間の諸問題で、ジャン・ジオノのある小説を研究。昨年より京都にて、フランス語を教える。

日　　時：2012 年 3 月 15 日（木）15 時～
会　　費：会員 1,000 円、一般 1,500 円（お菓子とドリンク付き）
場　　所：カフェ「Mardi Mardi」（マルディ・マルディ）
※奈良市登美ヶ丘３丁目 12-9 登美ヶ丘ビル 1F　（TEL/FAX:0742-44-5701）
学園前駅からバス（110・128・129・130・138・260 番）で７分、
西登美ヶ丘二丁目バス停すぐ（駐車場あり）http://mardimardi.exblog.jp/11477753/
問い合わせと申込み：　奈良日仏協会　E-mail　afjn_info@kcn.jp　　TEL/FAX　0743-54-0052

◆フランス生まれの手芸講座ご案内

イメージです

『春色 Fleur fraîche（生花）のパリスタイルアレンジ』

日　時：2012 年 2 月 25 日(土)13 時 30 分～
場　所：カフェテラス　サンフラワー
会　費：4,000 円（レッスン料、材料費、花器、ドリンク付き）
持ち物：ハサミ、作品持ち帰り袋
講　師：古川さやか　　vert de gris 主宰
申込みと問い合わせ：事務局　中野まで　090-7750-8570

＊次回レッスン予定は、カルトナージュ。3 月 31 日（土）13 時 30 分～　お楽しみに♪

2012 年お花見会のお知らせ　～大和文華館美術鑑賞・講演・音楽・芸能～

「特別企画展　花 の 美 術 」　－様々な花をモチーフとした華やかな作品－

学園前の閑静な住宅街の中には、美術館がいくつかあります。その中のひとつ大和文華館は、昨年開館50周年を記念してリニューアルとなりました。美術館を取り囲む文華苑は、この季節三春の滝桜をはじめ、雪柳、菊桃などが見頃となります。懇親会会場となる文華ホールは、辰野金吾によって設計された奈良ホテルのラウンジの一部が移築された貴重な建物として知られます。そして、浮世絵の世界的大家浅野秀剛館長による講演と岡田由美子さんの歌、青山登美子さん（会員）の日本舞踊と盛りだくさんです。非会員の方の参加も大歓迎ですので、皆様お誘いあわせの上、奮ってご参加ください。

日　時：　2012 年 4 月 8 日（日）
　　10 時 30 分　　受付開始（美術館内　講堂前）
　　11 時 00 分～　浅野館長講演、青山会員日本舞踊（講堂）、特別企画展鑑賞、文華苑散策
　　13 時頃～　　懇親会、岡田さん独唱（文華ホール）
　　15 時頃終宴

場　所：　大和文華館　　奈良市学園南 1 丁目 11-6　　電話 0742-45-0544
　　近鉄学園前駅南口より徒歩約 7 分
会　費：　会員　2,000 円　　非会員　3,000 円
参加申込みと問い合わせ：　TEL/FAX 0743-52-3939
　　FAX またはメールにて　協会までお申込下さい。3 月 31 日締切

2011 年度　第 7 回理事会報告

日　時：　2012 年 1 月 13 日(金)　15 時 00 分～17 時 00 分
場　所：　グリーンホテル馬酔木　会議室
出席者：　坂本会長、三野副会長、ジャメ副会長、濱副会長、浅井理事、仲井理事、
　　中野理事、樋口理事、三木理事、森井理事
議　事：
1. 2012 年度 総会（2 月 5 日）の計画
2. 懇親会の計画
3. お花見会の計画
　日時：4 月 8 日（日）、場所：大和文華館、講演及び美術鑑賞、音楽・芸能
4. その他　①Mon Nara
　②懸案事項への対処　＊モンナラ編集　＊クラブ活動支援の方針
　③名簿作成の方針
　④20 周年記念事業に向けて　⑤次回理事会予定　⑥その他

2012 年度会費の振込みをお願いします！

今年度はじめてのモンナラとなる今回。2012 年度会費の振り込み用紙を同封させていただきました。
今年度もモンナラ発行をはじめとする協会運営の充実を図っていきたいと思っておりますので、早めの振込みにご協力ください。

Mon Nara　Janvier-Février　2011 1,2 月合併号　Numéro248

奈良日仏協会　Association Franco-Japonaise de Nara
HP：　http://www.afjn.jp　E-mail : afjn_info@kcn.jp　TEL/FAX　0743-52-3939
〒630-8691 郵便事業株式会社奈良支店 私書箱 30 号（郵便物のみ）　発行責任者：坂本成彦